研究ノート

戦争論研究序説（四）

植村秀樹

一　問題意識
二　クラウゼヴィッツ『戦争論』の刊行と翻訳
三　『戦争論』の序文類
四　詩人ハイネの見たプロイセン・ドイツ
五　ナポレオンの支配とプロイセン改革
六　軍制改革とクラウゼヴィッツ
七　「戦争は他の手段による政治の継続」（一）
八　クラウゼヴィッツと哲学（一）

以上、第十八巻第二号（二〇一九年二月）
以上、第十九巻第一号（二〇一九年九月）

九　リデルハートの「亡霊」
十　レイモン・アロンと『戦争論』

以上、第十九巻第二号（二〇二〇年二月）

十一　「亡霊」の系譜（一）

クラウゼヴィッツ『戦争論』は多くの誤解を招き、見当違いの批判や非難を浴びてきた。本稿でもすでに、西谷修の誤解――というより全くの無理解――を指摘したほか、リデルハート『ナポレオンの亡霊』をその例に挙げ、クラウゼヴィッツに「大量殺戮の唱道者」との非難を浴びせ、長期にわたって多数の犠牲者を出した悲惨な第一次世界大戦の責任をクラウゼヴィッツに帰せようとしたことを見てきた。では、当のドイツではどうだったであろうか。

大戦前に退役したドイツ陸軍元帥のゴルツ（Colmar von der Goltz）は、アロンによれば、「絶対的戦争と現実の戦争の区別がつかなかった」[1]。これは『戦争論』の完全なる読み間違いである。では、こうした誤解や無理解はゴルツひとりだったであろうか。二十世紀前半の代表的な将軍がどのような戦争論を展開したか、クラウゼヴィッツとその『戦争論』がどのように解釈され、位置づけられていたか。まずは、第一次世界大戦前後にドイツ陸軍において大きな役割を果たした二人の軍人、ゼークト（Hans von Seeckt）とルーデンドルフ（Erich Ludendolff）を取り上げよう。リデルハートと同時代を生き、同じ戦争に関わったドイツの軍人がどのような戦争観を持ち、クラウゼヴィッツ『戦争論』をどう理解していたかを見ることで、リデルハートの「亡霊」との関係にも理解が及ぶものとなろう。

ゼークトは、ドイツ陸軍第三軍団参謀長として第一次世界大戦に臨んだ。大戦後期にはトルコ（オスマン

帝国）軍参謀総長に赴任するなどの時期もあったが、その後ドイツ軍に復帰し、ヒンデンブルク（Paul von Hindenburg）退任後の最後の参謀総長を務め、大戦後は陸軍統帥部長官に就任し、一九二〇年から二六年までは新国防軍の編制にあたった。上級大将で退役した後は執筆活動に力を入れ、『一軍人の思想』（*Gedanken eines Soldaten*）その他数冊の著書を残している。いわば功成り名遂げた軍人の晩年の著書であるだけに、まさにその到達点を示すものといえよう。

ゼークトはクラウゼヴィッツの「戦争は他の手段をもってする政治の継続である」との命題について、「他の手段を交えた政治的交渉の継続」と解釈し、そのような「真意」を理解しないと「危険」だという。また、クラウゼヴィッツは「戦争の本質」として、「戦争の目標は敵の殲滅にある」と認めていたと解釈している。[2] これではリデルハートと変わらない。また、「政治の継続」もかなり狭く解釈している点などは気になる。しかし、ゼークトは、フランス革命以降の戦争の変化、および政治と戦争の関係について、的確に捉えていた。「フランス革命の思想は戦争にまったく新たな時期を画した」として、「フランス革命軍の収め得た成功は、革命軍が特に有能」であったからではなく、「まったく政治に因由する」ものであったと理解する。ナポレオンもまた「フランス革命の思想を実現した」のであり、「高邁な意志を遂行し偉大な目的を達成するために国民の力を糾合した」のだと理解していた。[3] さらには「軍の国民的性格」について、次のように述べる。

> 軍は国民の一部であり、またかかる部分としての自覚を有せねばならぬということである。既に今日では、いかなる国の軍も純粋な国民的性格を帯びたもののみであると考えてよい、さすれば一国民の具有するすべての性質はそのまま軍の性質に反映する筈である。[4]

つまり、軍は「国家の国民的統一を具現するもの」であり、「国家も軍も、自己のためにのみ存在するものではない。両者はいづれも、生存し存立せんとする国民の意志を表現する二つの形式にほかならない」とゼークトは解する。したがって、「軍は、国家の中に更に国家を建てるものであってはならぬ」のである。[5]

続いてルーデンドルフの『総力戦』(*Der Totale Krieg*)を見てみよう。ルーデンドルフは第一次世界大戦時、ヒンデンブルクのもとで参謀次長を務め、政治指導が弱体した中にあって政治への関与も強め、「ルーデンドルフ独裁」とまで言われるようになった。後にヒンデンブルクと袂を分かち、ナチスに接近するなど、政治にも関与した。『総力戦』はルーデンドルフ最晩年の著作であり、すでにナチス政権時代に入っていた一九三五年、この世を去る二年前に出版されたものである。『総力戦』は、ルーデンドルフが最後に行き着いた戦争についての認識といえるであろう。

こちらはゼークトとかなり様相が異なる。クラウゼヴィッツは戦争の目的を考察する中で「会戦や戦闘での敵兵力の殲滅のみを念頭においている」と、リデルハートやゼークトと同じ読み違いを犯しているが、ルーデンドルフはこれにとどまらない。『戦争論』は「過去の世界史の発展に属するもので、今日では多くの部分で時代遅れであり、それどころか、それを研究することは混乱さえもたらす」というのである。[6] クラウゼヴィッツの時代から百年を経て、政治は本質的に変化しており、その結果、「政治と戦争指導の関係も変化」した。『戦争論』ではそれに対応できないという。[7]

> 戦争の本質および政治の本質が変化したように、政治と戦争遂行の関係も変化しなければならない。クラウゼヴィッツの理論はすべて放棄しなければならない。（中略）政治は戦争遂行に資するものでなければならない。[8]

クラウゼヴィッツの完全否定といってよい。完全にクラウゼヴィッツの定式を転倒させ、「政治は戦争遂行に資するものでなければならない」と主張するルーデンドルフは、どのような戦争を考えていたのか。それはこの本の表題にそのまま表れている。「総力戦」である。第一次世界大戦がそうであったように、今や戦争は「国民全体が戦争遂行に動員され」、「戦争の舞台は、参戦国の国民の全領域にまで文字通り広がっている」というのがルーデンドルフの歴史観、戦争観である。[9]「すべての会戦の最終目標は、敵の殲滅である」という限りにおいては、リデルハートやゼークトにも見られた『戦争論』のよくある誤解とも思われるが、「強靭な精神をもった国民に対して戦争の決着は、戦場での勝利と、敵ながら精神的な強さを維持したままの軍および精神的に団結した国民を殲滅することによってのみ達成できる」となると、それを大きく逸脱している。ルーデンドルフの総力戦論に従えば、全国民のすべての資源を戦争に投入するのであって、そのため「将帥は、政治が戦争遂行のために従わなければならない方針を政治の中で決定する」ことになる。[10]これではまさに一国の政治を軍部独裁に委ねることになる。かつての「ルーデンドルフ独裁」の理論化とでもいえようか。この総力戦論においては、国民は、戦争のために軍に動員される資源の一部に過ぎない。クラウゼヴィッツ『戦争論』の完全なる転倒にして根本的否定である。これこそ『戦争論』の全くの無理解ないし曲解の極みであり、謬論あるいは謬妄と呼ぶべきであろう。ドイツ軍人の行き着いた先にこのようなものが待ち受けていた。ルーデンドルフは『総力戦』の中でしばしば好意的に日本にも言及しているが、この後、実際にドイツと日本はともに、ルーデンドルフが予言したかのようにそれぞれ総力戦に突入し、破滅に至る。もっとも、それを主導したのは、ドイツではヒトラー（Adolf Hitler）率いるナチス党であり、日本では軍部という違いがあったが。

ゼークトとルーデンドルフの二人の戦争観とそこにおけるクラウゼヴィッツ『戦争論』の理解をいずれも晩年の著書によって見てきたが、ドイツ軍事史研究者の小堤盾は、二人の思想を次のように整理している。

ゼークトの見解は、思想的には国民生活を含む総力戦の可能性を認め、その一方で軍部独裁を主張したルーデンドルフとは対照的な戦争指導のあり方を構想していた。

ゼークトによるクラウゼヴィッツの思想的解釈は、精神力の強調と殲滅戦理論の追求という第二帝政期以来のプロイセン軍事学の伝統を受け継いだものであった。（一部略）[11]

第一次世界大戦について、アロンは言う。

読む術も知らなければ、企画力も思考力もない者が演じた愚行について、一人の著者に罪があるといえるであろうか。[12]

ただし、この言葉はドイツにではなく、フランス人に向けてのものである。クラウゼヴィッツ『戦争論』に対する誤解や無理解に基づく謬論はドイツだけのものではなかった。

十二　「亡霊」の系譜（二）

ドイツ以外、つまり外国におけるクラウゼヴィッツ『戦争論』の理解ということになれば、もちろんそこには翻訳の問題がある。不完全ないし不正確な翻訳で『戦争論』を読んだ結果、十九世紀末のフランス軍人は「クラウゼヴィッツの包括的な思想を理解することができなくて、彼を戯画化し、しかも、その本質をつかんだと思いこんでいた」[13]。その一方、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての時期に限ってみると、ドイツより

もむしろフランスにおいて、『戦争論』はより注目されていた。特にその精神力（moral force）の強調が、攻勢的戦略とあいまって、フランスの軍人らの関心を引いたようである。[14] とはいえ、第一次世界大戦末期に連合国軍総司令官に就任したフォッシュ（Ferdinand Foch）もゴルツ同様に「絶対的戦争と現実の戦争の区別がつかなかった」。

では、ルーデンドルフ『総力戦』で言及された日本では、クラウゼヴィッツ『戦争論』をどのように受容し、理解したのか。日本における『戦争論』受容の第一段階についてここで簡単に見ておこう。明治政府は当初、一八八〇年代より陸軍をフランス式からドイツ式に転換し、アジア太平洋の敗戦までこれが続いた。[15] 一八八三年に開校した陸軍大学校もドイツ陸軍参謀総長のモルトケ（Helmuth von Moltke）の方法に倣い、またモルトケの推薦により、教官としてメッケル（Klemens Meckel）少佐（後、少将）を招聘した。[16] クラウゼヴィッツ『戦争論』は軍医の森林太郎（鴎外）がドイツ留学時代に接し、後に一部の翻訳を行った。[17] 陸軍参謀本部では一八八六年にフランス語版からの翻訳を行い、森のものと合わせて全巻を『大戦学理』として、日露戦争前年の一九〇三年に軍部内で配布した。[18] 翻訳の経緯からも推察されるのは、森が担当した部分も含めて、初版ではなく、第二版以降の、つまり改竄された版の翻訳であったということである。旧軍出身で戦後長く陸上自衛隊幹部学校で教官を務めた浅野祐吾によれば、旧日本軍は日露戦争の後、「一九〇七年攻勢作戦による速戦即決主義を採用してこれを国防方針とした」。その後は、「国家戦略不在の軍事戦略が、野戦軍レベルを相似的に拡大したままで樹てられるに至った」。その日本軍において「戦争は政治の継続」というクラウゼヴィッツの命題は「忘れられたのではないにしても軽視された」。一九三〇年代には「クラウゼヴィッツブーム」が起こったというが、「四〇年代には国家主義の影響を受けて客観性、科学性に欠ける偏狭な著書も少なからずみられるようになった」。軍部においては、「クラウゼヴィッツの著書に関する講義が陸大において一度も行われな

かったことや、作戦に関する理論や戦史の研究成果において、殆どみるべきものが少なかった」という事態に至ったのであった[19]。浅野は自らが所属した組織についてこう結論づける。

> 戦闘の技術面に偏重した陸軍はこのようにその理論研究さえも軽視し、用兵効率の向上をねらっての鍛錬主義のみ徹して行ったのである[20]。

このような軍に引きずられていった大日本帝国は、当然の結末を迎えた。既に述べたように、戦後の日本でクラウゼヴィッツ『戦争論』が新たに刊行されるのは一九六〇年代のことである。そして、その翻訳事情もすでに述べた通りである。欧米諸国と同じく不幸な運命をたどった『戦争論』であるが、それでも本格的な研究が全く行われてこなかったというわけではない。一部に熱心な研究者が確かに存在した。ただし、それは軍部でも自衛隊でもなければ、アカデミーの世界でもない。この問題についてはあらためて論じたい。

『戦争論』の外国語への翻訳はいずれも何らかの問題を抱えていることがわかったが、英語版もその例外ではないこともすでに触れた通りである。問題が多いといわれるグラハム訳が出版されたのは一九〇八年であった。アロンは、リデルハートが「クラウゼヴィッツを理解もせずに、彼が後に来る平和など意に介することなく徹底的な戦争を教示したとして非難」するほどの「敵意」を示したと評しているが[21]、ドイツ語を解さないリデルハートは、このグラハム版でさえ読み通していないと見られる[22]。「殲滅戦の唱道者」という謬見を抱いたのは、当然の帰結と言い得るであろう。

その後も英語訳の事情は長らく改善されなかった。一九六八年にペンギン・ブックスから出版された版は、全訳でなく、第五部から第七部までがそっくり除外された。その中でも、アロンが特に重要視しているのは、

「防御」の表題を持ち、原著で最も長い第六部を省略したことである。一八二七年以降の書き直しが十分に及んでいないという意味で未完のままながら、防御と攻撃の弁証法を扱っている第六部をアロンは自著『戦争を考える』では原著における分量を意識したかのごとく、丁寧に論じている。しかし、防御を優位とみるクラウゼヴィッツの見解は、ドイツの軍人の間でも甚だ不評であった[23]。当時のドイツ軍人は攻勢的な戦略を望んでいた。多くの国の軍人同様、『戦争論』に実際の戦争のための処方箋を求めていたのであり、そうした姿勢が先に述べたルーデンドルフの総力戦論につながった。ルーデンドルフが明確に否定するまでは、軍人らはクラウゼヴィッツを社交辞令のように引用し、言及していたにすぎないということである。

さて、ペンギン版がこの第六部を省略したのは、この版の編者となったラパポート（Anatol Rapoport）の判断――少なくとも同意――によるものであろう。序文では現代の読者のための編集であることがうたわれている[24]。ラパポートはアメリカへの亡命知識人で、数理生物学者でありながら、ベトナム戦争に反対し、平和研究や平和運動においても知られた存在である。日本でも『戦略と良心』、『囚人のジレンマ――紛争と協力に関する心理学的研究』、『現代の戦争と平和の理論』などの著書が出版されている。そのラパポートがこのペンギン版『戦争論』に七〇ページに及ぶ序論（Introduction）を書いている。その中でラパポートは戦争哲学についての分析を披露し、クラウゼヴィッツもそのひとりと位置づけている。しかし、先に述べたとおり、第六部を省略することは、防御と攻撃の弁証法という『戦争論』において極めて重要な論理を無視することである。また、クラウゼヴィッツにおいて、戦争における目的と手段は交換可能なものとみなしたり、「絶対戦争」が第一次世界大戦で現実のものとなったとするなど、ラパポートが『戦争論』を十分に理解しているかどうか甚だ怪しい。さらに、カーン（Harman Kahn）らの核戦略論を批判するとともに、アロンについても「ネオ・クラウゼヴィッツ派」と批判的に言及している。ラパポートのような著名な学者でさえ、クラウゼヴィッツ

『戦争論』を十分かつ正確に理解していなかったということのようである。

ペンギン版『戦争論』のラパポートの序論から、アロンは次の一節を引用している。

> クラウゼヴィッツの戦争と政治の関係についての考えを、それぞれの目的と手段に関して調べてみるならば、この両者は相互に交換できるもののように思われる。軍の機能は、国家の意志を実行することである。国家の意志は、他の諸国に対してその力を絶えず増強することに向けられているものと暗に考えられているのであるから、それは、将来の闘争のための戦略的利益を得るべき機会を求め、かつとらえることである。要するに、クラウゼヴィッツの国家観においては、国家と軍の利益は一致するのである。(25)

この一節についてアロンは「テクストに相いれないし、クラウゼヴィッツの思考の論理とも、我々が彼の政治哲学について知っているすべてとも相いれない」として、こうした理解を否定している。

このように「亡霊」の系譜を辿ってみると、「攻勢戦略の唱道者」、「殲滅戦の提唱者」という誤った認識は、多くの国において共通している。実際の姿とは大きく異なるこのようなクラウゼヴィッツの姿は、まさに「亡霊」と呼ぶにふさわしいが、それが広く世界を徘徊した。それでは、この「亡霊」とは、いったい何なのか。何がそれを生んだのか。

十三　「亡霊」の正体

「亡霊」がどのようにして生まれたか、その起源を探る前に、ここでもうひとりの軍人について――ドイツ軍人の名誉のためにも――見ておきたい。

ドイツ陸軍参謀総長を務めた上級大将のベック（Ludwig Beck）は、ナチス政権下の一九三三年から陸軍参謀総長に就きながらも、ヒトラーとの対立によって三八年にこれを辞任した。「ルーデンドルフ独裁」を厳しく批判したベックは、その総力戦思想との対立を通じて「自らの政軍関係観、戦争観を発展」させた[26]。小堤によれば、ベックは「戦争が政治の手段である以上、戦争は政治に奉仕するものである。しかし、軍司令官は政治家に奉仕すべきではないし従属すべきでもない」という考え方に影響を受けたという[27]。この考え方に共鳴し、政治指導者（ないし指導部）と軍の最高司令官は対等だとベックは考えた。政軍関係をめぐってヒトラーと対立したベックは退官後、特に政治と軍事との関係に強い関心を抱いて、クラウゼヴィッツ『戦争論』の研究に取り組んだ[28]。しかしながら、『戦争論』の初版では、政治指導者ないし指導部は軍司令官に対して優越するとクラウゼヴィッツは明確に記していたが[29]、その後、改竄され、さまざまな解釈を生む余地が生じた。戦争は政治の道具であっても、軍人が政治家に従属するわけではないのであれば、軍部が直ちにヒトラー政治の手足となるわけではないということになる。実際にそのように考えたベックは、一九四四年七月二十日のヒトラー暗殺未遂事件に関与し、最後は自ら命を絶った（大戦後、ナチスへの抵抗運動の実行者のひとりとして顕彰された）。改竄版に基づく誤解がベックの背中を押したと見るのは、行き過ぎだろうか。ベックは「クラウゼヴィッツの最も重要な弟子という評価を受けてきた」とされるが[30]、そのような見方には、確かに理由がないわけではない。『戦争論』は、戦争と政治との関係についての理解において、ベックがクラウゼヴィッツを援

用することでルーデンドルフの総力戦論及び軍部独裁論の論破のために大いに役立ち、さらに、ナチスの軍国体制への批判の理論的根拠をベックに提供するものでもあった[31]。とはいえ、政治と軍事との関係という最も重要な点でクラウゼヴィッツを正しく理解していなかった点を看過するわけにはいかず、ベックは――情状酌量の余地があるとはいえ――クラウゼヴィッツの忠実な弟子とは言い難いと考えざるを得ない。このあたりには改竄の悪影響があると思われるのである。

改竄はプロイセン参謀本部の手によって、軍部に都合よくなされたはずであるが、実は、ドイツにおいても、『戦争論』は必ずしもよく読まれていなかったという事情が浮かび上がる。ドイツを統一に導いた強権政治（Machatpolitik）で知られるビスマルク（Otto von Bismarck）は「おそらくクラウゼヴィッツを読んではいなかったであろう」と推測しているアロンは、当時のドイツ人は「あんなに長い間クラウゼヴィッツを援用しながら、『戦争論』のいろいろな読み方の間に矛盾があることに気づかなかった」としている[32]。プロイセン参謀総長としてドイツ統一戦争の勝利に貢献したモルトケも例外ではなかった。政治と戦争との関係についてのモルトケの見方も、「軍の将帥たちの好みに合わせた、良識にもクラウゼヴィッツの思想にも反する」ものであった。「政治と戦争との関係、戦略および戦術における防御と攻撃との関係」の重要性を十九世紀のドイツの軍人たちは「理解しなかったし、その真実を認めようとしなかった[33]」。そのままドイツ軍は世紀をまたぎ、第一次世界大戦に至った。大戦中だけで『戦争論』は六版を重ねたというが[34]、実のところ、普仏戦争後からすでにクラウゼヴィッツ離れが始まっていたのであって[35]、第一次世界大戦前にはあまり読まれてはいなかった。謬論がドイツ軍にはびこったのは、第二版（一八五三年）以降の改竄の影響もあろうが、それだけでは説明がつかないように思われる。広くドイツ軍とそれを取り巻く政治・社会状況によるものと考えるべきであろう。小堤によれば、ドイツ統一戦争から第一次世界大戦に至る時期のドイツでは、「クラウゼヴィッツの位置

付けは、殲滅戦理論提唱者という評価が支配的であった」のであり[36]、「亡霊」は、ゴルツやルーデンドルフらにとどまらず、ドイツ軍部及びその周辺にも共有されていたと言い得る。

クラウゼヴィッツの「弟子」を自認していたシュリーフェン（Alfred von Schlieffen）でさえ、その哲学的概念を批判し、戦争指導の指針として『戦争論』を見ていた。そして、その指針とは殲滅戦である。先に触れたゼークトも「クラウゼヴィッツは自分にとって重要ではない」と妻への手紙に書いているし、他の多くの将軍にとってもクラウゼヴィッツは「軍事哲学者」であって、実践的ではないと見なされていた。陸軍大学や参謀本部においてさえ、「軍事哲学として引用はされるが、しっかり研究されているわけではない」という扱いを受けていた[37]。

こうなると、ドイツ統一以降、ドイツ軍部は自ら生み出した「亡霊」に取り憑かれ、その結果として二度の世界大戦にあのようなかたちで突入し、凄惨な殲滅戦を繰り広げたということか。第一次世界大戦はクラウゼヴィッツではなく、シュリーフェンの影響が大きく、第二次世界大戦はヒトラーによる軍国主義化とその戦争指導が戦争の惨害を大きくしたという見方が成り立つであろう。いささか短絡的との誹りを免れないかもしれないが、それでもあながち的外れではないのではあるまいか。リップサービスを受けていただけのクラウゼヴィッツに責任を押し付けるのは、文字通り無責任な責任転嫁に他ならない。

クラウゼヴィッツは殲滅戦を唱道したわけではなく、『戦争論』においては、防御は攻撃より有利であるとする防御と攻撃の弁証法を論じたのであった。シュリーフェンをはじめとするドイツ軍の攻勢戦略とはむしろ相容れない関係にあった。つまり、二十世紀の二度の凄惨な戦争は、クラウゼヴィッツの理論によるのではなく、むしろ反対に、クラウゼヴィッツを「教授たちによって読まれるべき理論家」として遠ざけ[38]、『戦争論』を正しく理解しなかったことから生じたというべきである。時代の変化が戦争の様相も大きく変容させた。そ

うした戦争の本質に迫ろうとしていたクラウゼヴィッツが『戦争論』の執筆に取り組み、それを書き上げようとしていたその時期とその方法に沿って理解しようとしない限り、『戦争論』が切り開いた新たな地平を見ることはできない。母国ドイツでさえ、それが行われなかった。

ナポレオン戦争がそれまでの戦争を大きく変えたのは、ひとりナポレオンによるものではなく、その時代の政治と社会が軍隊と戦争のあり方を変えたのであるとするならば、二十世紀の戦争もまた、時代の変化が生み出したと考えるのが自然というものであろう。前世紀の一軍人の著書がヨーロッパ全土を戦乱の渦に巻き込んだとするのは、歴史の理解としても、やはり受け入れがたい。

あのような惨事の原因を八十年も前の一軍人の書物に帰することの理不尽もさることながら、そもそも『戦争論』の読み方そのものにも問題があると思われる。この点について、アロンもリデルハートが「第一次大戦の気違いじみた流血的惨事は、少なくとも一部は、『戦争論』に含まれる、いくつかの主題が人心に及ぼした魔力のせい」と考えている点を指摘しているが、その責任の一端はクラウゼヴィッツ自身にもあるとアロンは言う[39]。『戦争論』は未完に終わっている上に、きわめて難解な書物である。執筆に着手してから未完のまま転任に伴う封印までに十年以上を要しており、その最後の三年間は、最も重要な政治と戦争との関係に関する長い思索の結果として、全体の書き直しを始めていた。『戦争論』を理解するにはそのような事情を考慮しつつ慎重に読まなければならないのだが、それがなされないケースが多い。自らが体験した戦争の歴史的意味を理解できない者が、その責任をクラウゼヴィッツに押しつけようとし、あるいは、クラウゼヴィッツ『戦争論』を理解しないままに、それを否定したということであろう。そして、そのように誤解され、曲解され、あるいは悪用される余地が『戦争論』にはあったということである。

それはとりもなおさず、『戦争論』が未完であり、本質的な改訂の途中で著者が斃れたということにその原

因を求めることができるが、これではまるでマルクス『資本論』の辿った運命を見るようである。そしてもうひとつ、『資本論』が見舞われることのなかった悲劇が『戦争論』を襲ったことが大きい。それが第二版の出版に際してプロイセン参謀本部の手によって改竄が行われ――もっとも、『資本論』も第二、第三巻は、マルクスの残した草稿がエンゲルス（Friedrich Engels）により編集されたものだが、その編集の過程でエンゲルスによって、意図的であるというよりは、おそらくは理解不足により、マルクスの意図とは異なったかたちで刊行されたといわれている――そのまま一九五二年まで版を重ねてきたことである。こうした『戦争論』が被った悲劇を払い除けて、そのままの姿に戻して、理解する必要がある。ドイツをはじめ、各国の軍関係者の間で誤解・曲解が起こり、それに基づく謬見・謬論が各地を徘徊し、二十世紀にとんでもない「亡霊」を生み出すに至った。時代の大きな変化の中でさまざまな謬見・謬論が生まれたのは、致し方のないことなのかもしれない。誤解によるものというだけでなく、時代がそのような曲解を後押しした、あるいは誤解を受け入れやすい政治・社会状況にあったということも考慮に入れるべきであるようにも思われる。フランス革命とナポレオン戦争に始まった国民戦争が、やがて国家総力戦へと向かう時代に合わせた解釈つまり曲解が生んだ謬論であったと解するべきではなかろうか。

二十世紀のはじめに二度にわたりフランスの首相を務めたクレマンソー（Georges Clemenceau）は「戦争は将軍に任せておくはあまりに重大である」と述べたと伝えられるが、これを援用するならば、『戦争論』は軍人の理解に任せるにはあまりにも高度な書物である。軍人は実践的な指針を求めるが、『戦争論』は戦争について歴史的、軍事的、政治的、哲学的な深い考察、洞察から生まれたものである。軍人たちが求めるものとの間のギャップはあまりにも大きく、そこに「亡霊」が生まれる余地があった。フランス革命とそれに続くナポレオン戦争以降、戦争は軍人に任せておくには重大にすぎるものになった。そのことを軍人のみならず、ほ

とんどの人が認識できていなかったことが明らかになるのに、二度の世界大戦を要したと言い換えることもできよう。そうした近代戦争の本質を解明しようと正面から挑んだ『戦争論』を正しく読み解くには、それなりの準備が求められる。それは歴史と戦争、そして政治についての知識もさることながら、哲学もきわめて重要である。むしろ、哲学的な準備こそ、不可欠というべきであろう。

十四　クラウゼヴィッツと哲学（二）

前節までの検討で明らかになったように、クラウゼヴィッツ『戦争論』を著者の意図に沿って正しく理解するためには、クラウゼヴィッツの方法論あるいは思考方法に注意しなければならない。クラウゼヴィッツがしばしば「戦争哲学者」と評されてきたことはすでに述べた。そしてそれが西谷修のように「クラウゼヴィッツは哲学を引用していない」などという浅薄な批判とは全く関わりなく、クローチェやアロンなど多くの哲学者や思想家の興味を引いてきたこともすでに述べたとおりである。したがって、「引用して」いるか否かでもなければ、あるいはクラウゼヴィッツ自身が『戦争論』の中で「哲学」という語をどう用いているかといったことでもなく、クラウゼヴィッツがどのような方法でどのように考えて『戦争論』を著したかという観点から考察することが重要である。クラウゼヴィッツと哲学との関係というと、マキァヴェリ、カント、ヘーゲル、モンテスキューといった名前がしばしば登場する。また、クラウゼヴィッツがマキァヴェリやモンテスキューの著作を読んでいたことはすでに述べたところであるが、果たしてクラウゼヴィッツはこれらの哲学者の思想やその方法とどのような関係があるのか、あるいはどのような影響を受けたのか。

クラウゼヴィッツの思考・思索そして『戦争論』の哲学的あるいは方法論的な基礎は何なのか。どのよう

な思想や哲学がクラウゼヴィッツに影響を与えたのか。『戦争論』を正確に読み解き、正しく理解するために、クラウゼヴィッツが身につけ、『戦争論』の執筆にも影響を与えた思考・思索の方法の理解に努めたい。それをここで哲学と呼ぶ。その時代の哲学は、その時代を生きる人におのずと影響を受けてしまうものであろう。だからこそ、たとえ当人が自覚的にそれを採用していないとしても、著作にはそれが現れる。

アロンの『戦争を考える』二巻のうちの上巻は、クラウゼヴィッツの生涯を辿り、その思索と執筆、つまり『戦争論』の成立過程とその論理の分析に充てられている。そこでは当然ながらクラウゼヴィッツの思索の軌跡が追跡されている。そのアロンによれば、「クラウゼヴィッツの思想または方法が、ある程度まで弁証法的であることを疑うものではない」としつつも、それは「ヘーゲルの弁証法に依っていただろうか。……ヘーゲル的ではありえないと私には思われる」と、明確に否定したことはすでに述べた。また、「ヘーゲルの弟子、クラウゼヴィッツという説は、とくにフランスやアメリカで」「無知から広まった」としている[40]。また、すでに述べたように、パレットはヘーゲルの影響を否定する一方で、カントの影響は否定しなかった。とはいえ、キーゼヴェッターを介して間接的にカント哲学に接したとしても、直接的にカント哲学を基礎にしているとまでは認めるものではなかった。カントを含む当時の哲学や思想全般の影響下にあったという意味で、いわば「時代の子」であるというものであった。このように、パレットとともにアロンもヘーゲルの影響は否定したことをあらためて確認したうえで、アロンのさらなる分析に筆を進めよう。

クラウゼヴィッツがコブレンツ勤務時代に記した「日付不詳の手記」がマリー夫人の「序文」に挿入されており、そこには「モンテスキューの問題の取り扱い方が私の念頭に浮んでいた」という件がある。これは「戦略を構成する主要問題」に関連している。クラウゼヴィッツは「素材」を「使用して一つの全体に融合せしめるところにまで凡そ立ち至った」という文の後にこれが続いている。その間をつないでいるのは、次の一節で

ある。

これらの素材は前もって計画されたプランなしに成立したものである。私の初めの意図は、体系や厳密な連関などを考慮せず、この問題の最も重要な諸点について、私が自分で結論づけたものを、まったく短いが精確に圧縮された諸命題の形で書き下すことであった[41]。

つまり集めた「素材」を体系づけて記述する際にモンテスキューの方法が念頭にあったというわけである。アロンは、「クラウゼヴィッツの概念化は、これまで人が述べたところ以上に、モンテスキューの概念化に近く、また、カントやヘーゲルの概念化によりも、モンテスキューのそれに似ている」と言う[42]。一般に『法の精神』の著者として知られるモンテスキューとはどのような人物で、どのような仕事を残し、どのような点がクラウゼヴィッツに影響を与えたのか。『自由論』や『ハリねずみと狐――「戦争と平和」の歴史哲学』などの著作で知られる哲学者のバーリン（Isaiah Berlin）は、モンテスキューについて次のように述べる。

モンテスキューは立憲主義を唱道するとともに、民事的自由の堅持と奴隷制の廃止、漸進主義、中庸、平和、国際協調、および、国民的伝統や地方の伝統にたいするそれ相応の配慮をともなった社会的経済的進歩を唱道した。彼は正義を信じ、法の支配を信じた[43]。

そして、モンテスキューの著書に見られる特徴として、「彼の学問は、警句と公理のたんなる寄せ集めにすぎなかった」のであり、「全体としては、体系性を欠き、矛盾だらけで、遺憾ながら所々においては浅薄でも

あった」とバーリンは指摘している。[44] このように評されるのも、デカルトやカントのような意味での体系的な思考や論理の展開とは対照的な執筆ぶりだったからである。

> 人間は多くの事柄、すなわち、気候、宗教、法律、政治の行なわれ方、過去の事例、習慣、習俗に支配されている。そして、これらの事柄による影響力の組み合わせから、一般精神が生まれる。[45]

このような認識に基づく徹底的な観察を積み上げていって「一般精神」に至るという方法論は、確かにクラウゼヴィッツ『戦争論』を彷彿させるものがある。自然的であると社会的であるとを問わず、さまざまな要素からなる人間社会を観察していけば、「人間の行動は、個人でも集団でも、原則的には理解可能である。もし、いろいろの事実が辛抱強く、またかしこく観察され、仮説がたてられ、確かめられ、法則が打ちたてられるならば、それは理解可能である」[46]。これがモンテスキューの問題意識であり、方法論である。モンテスキューは「啓蒙思想の創始者の一人と見ることができるが」、「懐疑的な色合いがみられ」、そして「経験主義者」であった。モンテスキューはこのように「観察のもたらす成果」を重視し、「生涯をつうじ、好奇の眼でこと細かく、飽くことを知らずに観察をつづけた」結果、「彼の著作には、枝葉末節や傍白のたぐいが非常に多い」。そのために、「法則を追求しているのであるが、実際は、具体的な細部に没頭している」、「多種多様な話題についての論考からなる無形の集積にすぎず、そこに一貫した体系があるとはとても見えない」という著作が残された。[47]

しかし、その一方で、「有機体としての社会の理念型を述べている」ことにも同様に注目すべきである。アリストテレスの政体分類の改良を試みたことから、モンテスキューは「理念型モデルを用いる」ことによって、「社会学的、歴史学的分析の中に、大きな足跡を残すことになった」とバーリンはモンテスキューを位置付け

ている。モンテスキューは社会の「内部構造、内的活動原理ないし動力」に関心をよせて観察と分析を続けた[48]。「彼に味方する者も反対する者も、彼はただ観察し、記述するだけで満足しているというのが普通である」というのは[49]、その意図が理解されにくい、つまり、誤解されやすいということであろう。このあたりにも、誤解というか、理解できない者によって曲解され、その意図とは異なる謬見が拡散したクラウゼヴィッツとも共通点がありそうである。「目的にたいして手段をいかに適用するかの知識や歴史的因果関係」を「把握することだけではなく」、「理解すること」を目指していたとは[50]、まるでクラウゼヴィッツについて述べているかのようでさえある。『法の精神』（*De l'Esprit des lois*）には、法律についての形而上学的な定義に関連して、「良き法律には、正義の命ずる規範が具現されている」とする一方、正義は「二つのものの間に実際に存在する適合関係であり、この関係はどんな場合においても同一」であるといい、「こういう不変の構造は『事物の本性から生ずる必然的関係』以外の何物でもない」と、バーリンはモンテスキューの思想を整理している[51]。

三権分立を提唱した『法の精神』――専門家の間では異論も多いが――の著者という、一般によく知られた印象からはなかなか想像しづらいような、一筋縄ではいかない思想家のようである。このモンテスキューを社会学の先駆者にして偉大な理論家と評価するアロンは、『法の精神』をその主著と認めながらも、「著述家であり、ほとんど小説家であり、と同時に法律家であり政治哲学者ということはまさしく真実である」としている。では、この歴史的名著の目的は何か。アロンはそれを「歴史を理解すること」だとして、次のように述べる。

> かれは歴史的真理を理解しようとした。しかし、かれにとって歴史的真理とは諸々の道徳、慣習、思想、法律、制度のほとんど無限の多様性という形態をとるように思われた。彼の探求の出発点は、まさしく、このように外見上、一貫性のない多様性というものであった。そこでこの探究の目標は、このように一貫

性のない多様性に概念上の秩序を与えることでなければならない[52]。

ここでアロンが強調する「多様性」は、バーリンのモンテスキュー論においてもやはり鍵となっている。多様性を尊重し、それを飽くことなく記述し続けたモンテスキューは、「新しい発見は、周到に集められた事実を総合することによってなされ」[53]、その上で活用されなければならないと考えた。『法の精神』が「多種多様な話題についての論考からなる無形の集積にすぎず、そこに一貫した体系があるとはとても見えない」のは、モンテスキューが「一元論者ではなく、多元論者である」からである[54]。経験主義者にして保守主義者のモンテスキューは、「寛容」によって多様性を尊重しつつも均衡を保とうと考えた。三権分立の提唱もそこから生まれたのであろうか。もっとも、「モンテスキューの根本思想は、法的な意味における権力の分立にあったのではなく、いわば政治的自由の条件としての社会勢力の均衡ということにあった」ことにも留意しておく必要があろう[55]。

体系的でなく、さまざまな観察を次々と積み上げての考察は、それだけに終わったわけではない。「無意味な事実を出発点として論理的な秩序を導き出したいと望んだ」というモンテスキューは、「世界を支配しているものは偶然ではない」、「偶然の混沌の底には、一見、不条理にみえる事物を説明する諸原理が横たわっている」という認識に行き着く[56]。モンテスキューは「因果必然性という関係範疇」のみならず「促進作用という関係範疇」を用いることで多様な考察を整理し、体系的な理解に導こうとした。「物理的現実とある社会的制度との間に関係」すなわち「蓋然性」を「発見しようとした」のであった[57]。そして、「多数の、局部的な規定要素が、個々の局部的解釈の多元性を否定せずに、いかにこの全体的解釈のなかに再構成されうるか」に関心を寄せて分析を進めたが[58]、こうした特殊と普遍との関係だけでなく、モンテスキューが「戦争は人間の現象であ

るよりもむしろ社会の現象」であり、「社会の本質に根ざすもの」と考えていたたことも[59]、戦争と政治との関係に関するクラウゼヴィッツの思索に何らかの示唆を与えた可能性も考えられるのではなかろうか。

このように見てくると、確かにクラウゼヴィッツに通じるものがあるように思われる。戦争も多様な様相が顔を出し、安易な理論化、一般化を拒む社会現象である。モンテスキューは「私が私の原理を発見するや、私の探し求めていたすべてがはっきりした」と『法の精神』の序文に記しているが、これをクラウゼヴィッツの政治と戦争との関係についての一九二七年に至った認識に比するのは行き過ぎであろうか。

ともあれ、クラウゼヴィッツがモンテスキューの考察と記述の方法に影響を受けたと考えても、何ら不都合はなさそうである。そうであったとは断定することはできないが、その可能性を否定することは難しそうである。アロンは、次のようにクラウゼヴィッツがモンテスキューに影響を受けていることを重視する。「ドイツで信じられている以上に、おそらく彼に影響を与えた『法の精神』の著者と同じく、彼は歴史的変化に、運命の偶然に、人間の情熱に順応した実践の理論を探求した」のだという[60]。さらに、テーゼ、アンチテーゼ、活路（Ausweg）の三契機からなる弁証法が『戦争論』第三部第七章で展開されるが、Ausweg（活路または出口）は、ヘーゲル哲学のジンテーゼ（Synthese）とは異なる論理である。また、「精神（Geist）という概念が用いられていることは、いやでもモンテスキューを思い出させる」、「精神と原則の二概念は、おそらくモンテスキューからヒントを得たものであろう」とアロンは言う[61]。その一方で、多様な歴史的事実について、飽くまで論理的に分析を進めて行くクラウゼヴィッツの姿は、やはりカントを無視することを許すものではないように思われる。次は、カント哲学について検討してみることが必要となろう。

注

（1）アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツと現代と戦略』、三四ページ。本稿で用いるのは佐藤毅夫（元国立国会図書館専門調査員）による翻訳である。これには「クラウゼヴィッツとその時代」の副題が付されているが、原題の「ヨーロッパの時代」よりも、こちらのほうが内容をよりよく表しているように思われる。なおこれは航空自衛隊幹部学校が、とりわけ同校幹部高級課程の教育に供するためにと一九九六年に印刷・製本したいわゆる私家版である。同校教官（当時）の千川一司氏のご厚意により、おそらく今後も出版されることはないであろうこの名著の日本語訳を譲り受けたのは、まさに僥倖というほかになく、あらためて謝意を表したい

（2）ハンス・フォン・ゼークト（篠田英雄訳）『一軍人の思想』（岩波書店、一九四〇年）、八－九ページ。文字遣いは現代風にあらためる。

（3）同前、一一七ページ。

（4）同前、一二二ページ。

（5）同前、一二三－一二四ページ。

（6）エーリヒ・ルーデンドルフ（伊藤智央訳）『総力戦』（原書房、二〇一五年）、一二ページ。

（7）同前、一七ページ。

（8）同前、二四ページ。

（9）同前、一四－一六ページ。

（10）同前、一二一、一五七、一七〇ページ。

（11）小堤盾「戦略なき時代のクラウゼヴィッツ――戦間期のドイツを中心に」清水多吉、石津朋之編『クラウゼヴィッツと「戦争論」』（彩流社、二〇〇八年）、二二六ページ。

（12）アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツと現代の戦略』、七二ページ。

（13）同前、三一－三二、四五四ページ。

（14）Douglas Porch, 'Clausewitz and the French 1981-1914' in Michael I. Handel ed. *Clausewitz and Modern Strategy* (London :

Frank Cass, 1986).

(15) 敗戦の占領下に始まった再軍備においては否応なくアメリカ式を導入したものの、旧軍将校の間には不満もあり、自衛隊に入隊後、旧軍式（ドイツ式）への復古を試みる者もいた。そのあたりの状況については次を参照。植村秀樹「敗戦後の『平和』と再軍備――象徴天皇制下の政治と軍事」『年報・日本現代史』第二十五号（二〇二〇年）。

(16) 浅野祐吾「近代日本におけるクラウゼヴィッツの影響」クラウゼヴィッツ協会編（クラゼヴィッツ研究委員会訳）『戦争なき自由とは――現代における政治と戦略の使命――』（日本工業新聞社、一九八三年）、五二一ページ。

(17) 植村、前掲「平和国家と戦争論」、九ページ。

(18) 浅野、前掲「近代日本におけるクラウゼヴィッツの影響」、五二三ページ。

(19) 同前、五二四－五二六、五二八ページ。「日本の伝統的精神の優越さに帰着させる観念的傾向を帯びるものが少なからず生じた」として、多田督知（陸軍大佐、ＢＣ級戦犯として服役）や高島辰彦（陸軍少将、ＢＣ級戦犯容疑者）の著書がその例として挙げられている。

(20) 同前、五二五－五二六ページ。

(21) アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツと現代の戦略』、四七九ページ。

(22) Michael I. Handel, 'Intruduction,' in Handel ed., *op. cit.*, p.21. 当時のイギリスを代表する軍人にして軍事研究者でもあったフラー（John. F. C. Fuller）もクラウゼヴィッツの研究はしていない。Jay Luvaas, 'Clausewitz, Fuller and Liddell Hart,' *ibid.*, pp. 201, 205.

(23) Jehuda L. Wallach, 'Misperception of Clausewitz' *On War* by the German Military,' *op. cit.*, p.220.

(24) Carl von Clausewitz, edited by Anatol Rapoport, *On War* (London: Penguin Books, 1968), p. 9.

(25) アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツとその時代』、二七七ページ。Rapoport, 'Introduction,' *ibid.*, p. 24.

(26) 小堤、前掲「戦略なき時代のクラウゼヴィッツ――戦間期のドイツを中心に」、二三四ページ。

(27) これはブルーメ（Hermann von Blume）の見解である。同前、二三五－二三六ページ。Klaus-Jürgen Müller, 'Clausewitz, Ludendorff and Beck: Some Remarks on Clausewitz' Influence on German Military Thinking in the 1930s and 1940s,' in

Handel ed., *op. cit.*, p. 246.

(28) Ibid., pp. 241-242.

(29) Ibid., p. 247.

(30) Ibid., p. 240.

(31) Ibid., pp. 259-263. このミューラーの論文で重要な論点のひとつは、ベックの'Politik'の解釈である。クラウゼヴィッツ『戦争論』におけるこの言葉をどう理解するかは、決定的といってよい重要性を持っている。あらためて論じることとする。

(32) アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツと現代の戦略』、一八－一九ページ。

(33) 同前、四七七ページ。

(34) Wallach, op. cit., p. 216, fn. 14.

(35) Williamson Murray, 'Clausewitz: Some Thoughts on What the Germans Got Right,' in Handel ed., *op. cit.*, pp. 267-268.

(36) 小堤、前掲「戦略なき時代のクラウゼヴィッツ――戦間期のドイツを中心に」、二一九ページ。

(37) Wallach, op. cit., pp. 214-217, 228-229.

(38) Murray, op. cit., p. 270.

(39) アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツと現代の戦略』、三－四ページ。

(40) アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツとその時代』、五七七、五七九ページ。

(41)『戦争論』上巻、五ページ。

(42) アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツとその時代』、一五七ページ。

(43) アイザイア・バーリン（福田歓一他編訳）『思想と思想家 ［バーリン選集1］』（岩波書店、一九八三年）、一四九ページ。

(44) 同前、一五〇－一五一ページ。

(45)『法の精神』第一九編第四章。バーリン、前掲『思想と思想家』、一五五－一五六ページ。

(46) バーリン、前掲『思想と思想家』、一五七ページ。

(47) 同前、一五八－一六〇ページ。

(48) 同前、一六五ページ。
(49) 同前、一六八ページ。
(50) 同前、一七二ページ。
(51) 同前、一八四－一八五ページ。
(52) レイモン・アロン（北川隆吉他訳）『社会学的思考の流れ』Ⅰ（法政大学出版局、一九七四年）、一七ページ。
(53) バーリン、前掲『思想と思想家』、一六一ページ。
(54) 同前、一九二－一九三ページ。
(55) アロン、前掲『社会学的思考の流れ』、三八ページ。
(56) 同前、一七－一八ページ。
(57) 同前、五二ページ。
(58) 同前、六一ページ。
(59) 同前、七二ページ。
(60) アロン、前掲『戦争を考える――クラウゼヴィッツとその時代』、二五ページ。
(61) 同前、五五四－五五五ページ。アロンによれば、ハールヴェーグもモンテスキューの影響に同意したという。同、六〇二ページ。